

系譜家傳錄

680
々
15/65

0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI

680  
ケ  
15

系譜家傳錄

藤孝譜

藤孝名與一即將軍義藤賜諱字稱  
 藤孝後任兵部大輔天文三年生母  
 船橋木外記清原宣賢號環女也實  
 三浦伊賀守源晴真號次男而  
 細川刑部少輔源元有養之為子因  
 冒細川氏後領城列長岡桂河地更  
 稱長岡  
 傳稱三浦氏其先室町幕府之落



亂也

西巳 天文十八年前將軍義晴及義輝避  
于好成之亂至江列或曰伊勢時藤孝年

十六從之有戰功

丑 永祿八年五月十九日王好在京丸

夫義繼松永右衛門佐久通子秀等

粹襲幕府弒義輝義輝弟僧覺慶為

南都一乘院門主義繼獻使白曰法

衣之身何痛之有哉勿勞高懷然監

衛嚴密禁人出入覺慶欲伺間逃去

以報仇乃贈書於藤孝謀之藤孝答

書謂米田壹收某刺髮號有謀才且

能醫術世人之所知也公托病召米

由可與之圖僕亦可以告米由覺慶

稱病召見既而良已矣於是催賀儀

賜酒於監衛者皆大醉米由乘夜負

覺慶潛入春日山覺慶以乳母為憂

米由復往而擁乳母來覺慶大喜藤

孝迎覺慶赴江列甲賀郡入和田伊

賀守惟政家覺慶長髮名義秋後取

遂移居刈矢島鄉

丙寅

九年藤孝與兄三淵大和守藤英從

侍義昭運策招聚幕府舊臣等而警

衛矢島館後義昭遣藤孝於佐々木

承禎請假力討逆徒再三承禎羈縻

而不果

丁卯

十年八月壬好氏與佐々木右衛門

督義弼子承禎通謀害義昭義昭逃出

矢島館赴若狹國欲依武田大膳大

夫義統義統義昭之姊夫也路至山

田浦乘舟舟子怪而猶豫矣藤孝界

錢飲酒賺之舟子乃解舟解纜既而

義昭入義統館幕府舊臣沼田勘解

由左衛門清延飯河肥後守盡力扶

翼焉然依義統有內難義昭慮事難

成而遣藤孝及上野中務大輔清信

赴越前國告意旨於朝倉左衛門大

夫義景義景應其命

辰戌

十一年義昭至越前居府中龍門寺

既而入安養寺○六月義昭以義景

情事漸疎，遣藤孝清信於織田信長。曰：我依賴吾子，京都快復之功，非吾子難成矣。信長以為武臣之面，自即從其命，使其家臣不破河內守，與藤孝清信同至。越前迎義昭，先是義昭之在江州也，藤孝慮信長英傑，必有成功而密通其情，故信長報及此矣。

○七月二十五日，義昭自越前入美濃國，立正寺。二十七日，信長來謁獻太刀治工一握，馬一蹄鎧二領，沈

香一器，縞絹百端，鳩眼千貫，且贈從士物。各有差，義昭使藤孝清信告信長曰：素聞吾子，勇武拔羣，嚮告討賊之事，幸不吝，遐遺速被許諾，而不遠君越之路，使數輩來迎，馬懇款之情不少。彼此謝而有餘，固是我家再興之守護神也。信長拜命之辱，且言曰：身不肖而在承天事，雖不堪辱，營而與賢君討賊，神祇何無加護哉。義昭大愧而賜酒宴，信長與藤孝議遣

使於作未東顧屢招之而不從焉  
信長欲先討之九月七日發燬身十  
一日至江列愛智川揚言攻觀音寺  
和田山而分留兵及攻吉田某建部  
源八所據之箕作城遂陷之時松井  
曾介康之又改名新介志水新丞清  
久又改名雅樂後號從藤孝有戰功  
義昭召康之清久感賞之二十八日  
義昭歸洛藤孝從之信長亦入洛翠  
日信長攻宍成半稅助於膳龍寺城

藤孝從軍宍成降

己巳  
十二年正月四日王好政康王好定  
逸宍成半稅助等起兵攻六條本國  
寺少夫身義昭藤孝自膳龍寺帥兵來  
戰於桂河邊松井康之清久先  
進康之被創清久得首級其弟惡柴  
衛亦繼進得首先諸士而馳至六條  
獻諸義昭義昭賜腰刀賞之召康之  
賜酒杯既而賊徒敗奔此行也信長  
急趨洛謁義昭聞合戰事故及藤孝

後援竭力太感賞焉

一、此戰以藤

頭藤賢者、非也、東之清文、藤考之

家臣、而以功、得賞、頭、然、則、為、藤、考、

無、疑、蓋、以、藤、考、藤、賢、

訓、響、稍、似、而、誤、之、乎、

元龜元年三月朔壬寅伊賀守入道

宋薰奉法名以南號瑞松院○八月

三好笑岩中城三好北齋日向城野

田據之使其黨安宅甚太郎居守福

島信長以本軍圍之九月三日義昭

發洛軍于提列中島藤考從之十二

日義昭及信長移軍于海老江距野

田福島僅十町許此後藤考屢有戰

功

頃年山城諸士屬松永而城戶野據

之藤考及藤英上野清信害成主稅

助攻破之義昭賜教書於藤英藤考

感賞之

藤考及藤英合兵攻大和國多門城

特興福寺僧徒出于三處渡邊小四

即津田與三郎細野藤九郎藤敦後

重友與之接戰藤考救渡邊等進擊于

破之義昭賜教書於藤孝褒之  
藤孝及藤英千階堂駿河守其驅催  
幕府舊臣潦倒大津松本者其兵三  
千餘人縱火於山城國任山邊討賊  
先是義昭催伊勢國長野宮內大輔  
植藤兵為藤孝等聲援植藤依病不  
能親赴馬以細野壹岐守藤敷為將  
率五百騎來加十月二十日平好兵  
庫頭津申新大未率兵四千餘人來  
戰千階堂戰死藤英勇進逼敵幾危

藤孝急救之與敵守野氏接鑓守野  
打墮藤孝鑓藤孝拔刀急接藤敷來  
救藤敷家僕真柄氏以鑓捧藤孝藤  
孝乃斲守野其夜藤孝授藤敷佩刀

中脇指治 謝之

右三件不詳年月姑記於此以備  
再考

未予 二年二月五日藤孝於大原連歌于  
句聖護院道澄三條大納言實板飛  
鳥井中將雅敷及紹巴昌叱玄哉心



菊英恬了玄宗仍宋及宋至等會之  
後天龍寺僧策彥作小序追如人數

代九周鎮康之亦  
改而唐通長廣次

中<sub>士</sub>三年十二月六日藤孝受古今集秘

說於三元院藤實枝身提回命志傳授之

是月信長獻諫書於義昭凡七十箇條其一曰公之流落也相從竭力致忠義者方今無得蒙顯賞僕佞邪僻者反被登庸云云先是永祿十二年

二月信長為義昭改作二條舊館諸士經營之以上野清信為監諸士各構假屋置役人藤孝及清信荒川莊兵衛輝宗其屋逐次相並時清信家奴與荒川家奴爭鬪以瓦礫投擊誤入藤孝假屋傷人奴等怒家士等聞之與荒川家士合逼清信假屋其餘多未加者清信家士悉亡逃離散弓鈇炮為人掠取清信大怒乃言於義昭曰藤孝援荒川加之掠奪諸物甚

無謂矣。義昭以清信為寵臣，不辨其是非，衝藤孝而漸疎之。後命信長欲殺藤孝，信長曰：「奴輩之論爭，何問之？若不聞而可也。」義昭不聽，強請之。信長曰：「如藤孝勤勞拔群，而信用清信之謬，以惡之，僕為公懼焉。若所為如此，則於僕亦無賴矣。請枉宥，恕義昭以為黨于藤孝，益憤怒。至是，信長切諫之，其曰：「致忠義者，斥藤孝曰：「便倖邪僻者，斥清信也。」藤孝憂義昭之背

信長而屢諫，遂不從。密與武田信玄通圖滅信長，并藤孝。藤孝不得已去，屬信長。

癸酉

天正元年春，藤孝聞義昭欲滅信長，屢馳使以告信長，寄書謝之。

公儀就中，遂心重而帝自移居淺井。一掃房上，沙紀尸于其下。上意趣帝，以信長之罪，以信長之罪，相視之。今在阿波，由信長之言，信長之進，上在阿波，信長之罪，信長之罪。

五律美海三三三三三三三三

一 捨別きききききききききききき

一 一おんあふふふ

一 智事一先白ふふふふふふふふ

一 若くはふふふふふふふふふふ

一 伊丹事一融方はははははははは

一 其身く由神妙く由常く由と一由は

一 調界く由は

一 石成りて連て一きききききききき

一 ふうふうふうふうふうふうふうふう

一 五事おね人上二融方はははははは

一 先飛行はははははははははは

一 遠三きききききききききききき

一 一教はははははははははははは

一 形舞起蛇屋茶向みねお坊はははは

一 定うお後油はははははははははは

一 同合らるはははははははははははは

一 一はははははははははははははは

一 半拍はははははははははははははは

一 五事用はははははははははははは



多岐の人等起すことなり

御門各部を相友 信長

芳名殊十二ヶ條の理を以て在り  
四條の辰辰辰計なり

一 寄附に海田友國の以てありて  
被團古出入相友なり

一 公義の信長相友の  
於上清も平均なり  
平毎具ありて

魂の業相友の  
河原の人もありて  
以下先相友なり

二月廿五日 信長 書判

御門各部を相友

女我内同系部、所て、國在り  
御信の人もありて

一 寄附に海田友國の以てありて  
君長國の辰辰辰計なり  
被團古出入相友なり

信長副助の書りうわ書落しとて  
皮書ハニ海に流す

一 宗朝會を以て成るる事ありて  
之を以てハトて年々其後其後其後其後  
之河を以て播磨同志堂とて以て其後其後  
山城を以てして其の地を以て其後其後  
其後其後其後其後其後其後其後其後

一 信虎甲斐守として江列中あり  
上書りうわ書りうわ書りうわ書り  
下書りうわ書りうわ書りうわ書り

一 取頼世河を以て成るる事ありて

一 中將とて成るる事ありて

一 此中とて成るる事ありて

一 公義おと成るる事ありて

一 又此中とて成るる事ありて

一 中將とて成るる事ありて

別紙に於てしるる事ありて



吾息子余命を以ては事第一と信じて  
身をたてし身人自覚の時には極楽を  
たりの由一とて教ふとて内新しむ  
可なり一因信下

一 福地より 義は心の中よりこぼれ物に

と方しんは身よりこぼれ物にこぼれ物に

一 両方通へん事ありて心の中よりこぼれ物に

一 とは白一揆成敗の事。身の中よりこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

事なりとて撰文より身の中よりこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に

一 一は心の中よりこぼれ物にこぼれ物に



印、手、足、心、力、皆、由、人、心、所、造、也、  
信長

三月七日 信長

御書

三月二十五日信長聞義昭舉兵帥  
大軍自岐阜赴洛二十九日藤孝兼  
木信濃守村重村重同諱迎謁於  
大津信長大悅問京師形狀而陳東  
山智恩院賜佩刀於藤孝村重賜之  
乃谷工 貞末 ○後 而欲攻幕府義

昭懼而乞信長乃歸岐阜○七月  
義昭再舉兵使日野藤輝資高倉藤  
永相伊勢伊勢守貞景三洲藤英留  
守幕府自據守治真木鴻城即日  
信長入洛軍于二條妙覺寺圍幕府  
日野高倉等降信長分軍為二向植  
島時藤孝謂我從信長者不得已也  
方今不忍向之而不出矣既而義昭  
戰敗奔普賢寺謝罪信長憐之使佐  
久間右衛門尉信盛木下秀吉圖之

而廢銅於河列若江城信長以三洞  
藤英黨于義昭使明智十兵衛光秀  
殺藤英及其子孫中郎秋豪於坂本  
城

或說此後藤孝及忠興率兵自五  
箇莊向榎島非也忠興今年才十  
一歲未出陣

信長賜藤孝城列西岡一萬石地有  
證書

信長與藤孝書

至人の地列河列若江城

尸候人全候之之相違之候如件

元龜四年七月十日 信長朱印

細川忠興右補後

藤孝入西岡土豪之士屬部下者皆  
來謁物集女宗入侍衆不服藤孝而  
罵曰我地世々所傳領也我無由出  
謁焉藤孝怒請信長殺之○二十七  
日藤孝攻岸成至稅助番頭大炊助  
訖訪飛驒守所據之淀城守兵二千

餘騎香頭諏訪内應信長岩成勇力  
絶人突出奮戰藤孝家僕下津權内  
水録岩成共阻橋下權内能浮沈于  
水或放而息馬或抱而銳馬遂斬其  
首而獻藤孝翌日藤孝使權内持岩  
成首到江列高島以獻信長特作信長  
島信長使權内仰面曰汝輔車食之  
之相也此行之戰功絶伦乃賜書  
感賞之并授黄金百兩一説信長賜  
書并所著  
服之小

戊甲

二年七月藤孝奉信長命擊賊徒於  
河列所々有功頃間信長赴尾列長  
島討一向僧徒蜂起藤孝獻使於長  
島信長有答書信長亦屢賜書

折帝汗見人の河内三ヶ所去海敵を  
御平及一戦首少く討揚、追殺る由  
心、控入之、仲、以、之、我、之、極、大、公、義、  
事、端、一、擧、く、捕、系、所、能、何、る、上、討、  
首、殺、多、人、且、長、鴻、一、取、お、る、は、深、  
く、身、入、衆、を、り、お、落、す、は、能、事、は、何、る、也、





先急ニウ在果事し海王山ノ大極僧  
ノ事ニ忠中ノ徳ノ方ノ大集立個自若  
而その計の事ニ表ニ新音由功等  
し其後下ニ多ク有し之りノ上落持到心  
表切平ニ戸ノ竹ノ柱頭好意ノ増ハ致シ  
八月十七日 信長 印  
長尾忠景ノ補友  
上段ノ萱振振移河補首領又ニ其  
加振之ハ沙ハ於丹ノ長威信ノ振ハ其  
我功者ノ人ニシテ海ノ

九月廿日 信長 印

長尾忠景ノ補友  
去上ノ竹飯堂下一揆ホシ付捕之候  
為其を此ハ此ノ人ニ表事人ニ為下首  
ニ并果ノ別ノ上落人ノ下ノ事ニ其地  
走者ノ人ニシテ海ノ

九月廿日 信長 印

長尾忠景ノ補友

三年春信長欲撃本願寺僧先佐藤  
識軍事賜書於藤孝

其林古任合戰尸首拾去丹別解書  
夏部之流傳至方、水舟寺、人教宗別  
石像正神袖折骨人山古尸解者可也  
其子の多要人決四件

天正三年三月廿日 信長朱印

信長公記

四月十三日、信長帥兵至天王寺、聞  
番西越後十河用備築城於泉堀邊  
新堀以據之、十七日攻之、藤孝有戰  
功十九日城陷、○五月、信長援奥平

凡八即信昌向參州長孫時藤孝獻  
書於信長有後書

去九月廿日、信長、藤孝、致書、同日、其  
子の、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
改、元、松、下、松、下、松、下、松、下、松、下、  
長、孫、信、昌、向、參、州、長、孫、時、藤、孝、獻、  
書、於、信、長、有、後、書、  
信、長、公、記、  
天、正、三、年、三、月、廿、日、  
信、長、朱、印、

身（私に推す意に思ふ事あり）

正月十日 信長 呈仰

長岡部を擧げ

折紙を授けて法然寺より寺内を巡視せし  
は義兵の汗血を以てまじりたる牛久保と  
志願する人殺押おん長岡部ありて三軍は  
融へ後河内郡ありて押法然寺あり  
通しし之を合部と部を擧げしは信長御眼  
前へ控申す事なれども送る所なし

正月十日 信長 呈仰

長岡部を擧げ

此義兵の擧げ先事ありしは之の由り人  
は戦場別及一戦を以て勝つて擧げし  
は未だありては信長御眼より自見し  
自見ありしは如末に事なれども信長不安  
念ふ其人の勝敗を以て信長御眼より  
是を御眼より事なれども信長御眼より

信長御眼より事なりし

正月十日 信長 未印

長尾忠邦の捕虜

去乙卯年夏、長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、

長尾忠邦、越前守に討ち出で、

長尾忠邦、越前守に討ち出で、

長尾忠邦、越前守に討ち出で、

長尾忠邦、越前守に討ち出で、

八月十二日、藤孝、長尾忠邦、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、

伐加賀、越前、賊徒、河野、新城、府中、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、

目崎、龍門、寺城、其餘、諸城、皆、攻、拔、之、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、

賊徒、散、徒、旬、之間、加、越、平、均、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、

九月、作、長、加、賜、藤、孝、舟、波、桑、田、船、井、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、

兩、郡、  
長尾忠邦、越前守に討ち出で、



四年三月本願寺光佐招聚紀伊越  
前門徒密與毛利輝元通好信長在  
京四月十四日以藤孝荒木攝律守  
村重惟任日向守光秀原田備中守  
直政筒井順慶為將率騎三萬餘攻  
光佐大坂城村重西自海上原田簡  
井南自天王寺藤孝光秀北自森口  
藤孝光秀縱火小戰信長聞賊圍天  
王寺子城五月五日帥兵軍河列若  
江為之聲援藤孝亦馳至翌日信長

將兵三萬騎以藤孝及佐久間信盛  
松永久秀為先鋒與敵兵數萬接戰  
城兵乘勢突出挾擊之賊徒敗走我  
兵追躡至大坂於是信長築子城十  
處於大坂四方而亟成乃使羣士分  
守之六月七日歸安土自是以後屢  
戰互有勝負信長賜書於藤孝感賞  
其戰功

為初初後惟子二  
存任例之終之少凡自大坂其第一撥以

進有首三三河九徳と云はるる是  
心海、船以下まゝく、是并、縁、神、徳、の、事  
感、懐、の、程、此、徳、之、方、一、去、玉、福、富、可、也  
也、

七月廿九日

信長 五印

長尾忠邦 右衛門

治、を、為、す、は、一、而、の、事、也、是、亦、泉、列  
亦、入、以、本、は、河、野、甲、乙、之、事、也、  
別、の、入、勢、之、事、也、  
河、を、為、す、也、

八月廿一日

五印

長尾忠邦 右衛門

五丁 五身二月、南、山、東、政、在、紀、州、岩、室、城、  
根、来、雜、賀、羣、士、應、之、信、長、欲、擊、貞、政、  
賜、書、於、藤、孝、以、催、兵、

根、耳、寺、向、働、事、松、坊、之、の、事、也、  
久、人、教、也、  
十三日、之、河、内、河、野、方、一、は、方、也、  
之、事、也、  
之、事、也、

うむ三人なりしを我の討つて安んずるは  
ゆゑに今もその事又ほ面々教ふに  
なれりしやゆゑに内なる事も皆  
甚ましくいふ事なるておぼや

二月十日 未印

長尾忠邦の物成

根来寺の事一ありあるは  
越ゆるにうらたしむるはしゆりし  
一しゆりし衆列國なりしこと  
しゆりしと安んずるはゆゑなり

長尾忠邦の物成  
二月十日 信長 未印

長尾忠邦の物成

十五日、信長發洛翠日至河内國若  
江、議先攻、負攻、黨和泉國、城、以  
藤孝等為先鋒、其子忠興從之、敵懼、  
入夜、乘舟、逃散、藤孝聞之、馳進、斬二  
三百人、○二十二日、信長死、志立、分  
兵、自海陸向、岩室城、藤孝及、瀧河、一  
益角井順慶、推任、光秀、推任、長秀、蜂

屋賴隆將兵三萬餘騎自谷輪口入  
敵出步卒與藤孝兵挑戰米田甚內  
是改後號物有由平吉主行後號中  
門又行下津權內藤木又存衛門成  
定先士卒進敵兵敗走追斬首數十  
級特權內挾青楨於背後踴躍奮戰  
偉長望見曰彼何為者乎近臣言曰  
長岡兵部大輔家僕下津權內先年  
斬岩主稅助者也曰木剛者也身  
今以青楨者於天下唯彼一人乎是後

世謂長既而信長移營翌日藤孝獻  
首級於信長令贈書於堀秀政使傳  
達接戰事故作長賜感書秀政亦有  
答書

以乃於長尾金殿之入祀教了人河也  
首至其起第少於骨之似之其  
其人教育教之其感信之深久從心  
二入劫也

二月七日 信長 呈

長尾金殿之入祀教了人河也

收し授あはしむるに... 表に碑に...  
數十人正河に首を又抄に...  
四枚を三河に別... 即感...  
おまじ... 野...  
おまじ... 野...  
おまじ... 野...

二月七日

秀政刊

是月梅作其發丹和時召權内面褒  
其勇猛○三月朔藤孝十益光秀長

秀順慶頼隆受信長命擊賊將鈴木  
孫一備攻具急逼城孫一即降  
是秋松永黨森氏海光名氏叛信長  
據河内厨岡城十月朔藤孝光秀順  
慶將兵黎明攻之藤孝兵先進入城  
城兵盡力拒之藤孝長子忠興年十  
五斬敵獲首級松井康之米田是政  
有吉立行等勵勇力敵兵遂潰森海  
光名并從士皆自殺此後藤孝兵下  
津權内等三十餘人光秀兵二十四

人戰沒信長賜感書於藤孝

一昨日初乃多休士高松好々々

高松好々々後神少々信少々抽我

功也

十月三日

信長未印

長尾景春傳及

五月藤孝從信忠攻和別信貴城經

百城陷○藤孝攻丹波叔井城或作福作

城城主叔及萱城

六年正月朔信長在安土城設茶會

召信忠及羽柴秀吉法印夕菴藤孝

林伊波守長谷川宗土惟任長秀龍

川一益惟任光秀荒木村重市橋九

郎左衛門金森長道於茶亭寅刻各

登營信長自迎接手自配饗膳茶會

了各退出信長自送之○二日信長

使藤孝等諸將觀安土殿主名物奇

品悉備置矣且日數年之間各盡勤

勞悉乎不煩者故如此之經營功成

珍重有餘諸將皆伏席拜謝○四月

毛利輝元攻山中鹿介幸盛播列上月城羽柴秀吉荒木村重帥兵救幸盛信長以信忠督諸將逐次赴之五月三日藤孝至播列屯于高碓邊六月十日秀吉至洛受信長命即日發途十一日至嘉子河告諸信忠十二日歸上月傳信長命十六日諸軍去上月趨書寫山翌日向神木城乃破却城邊廬舍欲列竹柵建井樓而遣人於志方山中採竹木以為其材用

志方城兵出要之諸將分遣兵綴城兵二十一日水野監物守尚催連歌會以慰在陣之間暇藤孝作發句七月村重丁益列鳥銃者於志方城東距城二十町許以警衛採竹木者城兵出擊村兵別以兵二百餘人籠表十益兵我兵馳進接戰藤孝與織田信雄在城東山分遣兵助之○十五日夜藤孝十益長秀村重合兵急攻神吉城翌日城兵乞降偏許之召出

神吉氏新大輔而使佐久間信盛家  
臣副田小十郎佐野傳右衛門斬之  
宥神吉藤大夫而送遣於志方城城  
尋降藤孝從信盛凱旋○十月藤孝  
屢獻書於信長告播磨及丹後丹波  
形狀賜答書

就緒列并丹波表之重信之信長  
○中ノ信長及瑞波之辨一宗宗入西  
美木之河内由久美益人丹波別莊任  
○十月十日信長之書丹波表之信長

○十月十日信長之書丹波表之信長  
○十月十日信長之書丹波表之信長  
○十月十日信長之書丹波表之信長

十月十日 信長 書

信長 書

○十月十日信長之書丹波表之信長  
○十月十日信長之書丹波表之信長  
○十月十日信長之書丹波表之信長

十月十日 信長 書

信長 書



荒木村重謀叛藤孝屢馳赤脚告之  
使信長賜書於藤孝

就因難攻切、拉所入逃、急切之  
移之、之何、藤孝、信長、万身、何、是、也  
之并、信、信、日、向、言、一、合、越、出、入、三、水、後、也  
和、同、之、後、藤、孝、之、言、一、程、古、其、松、井、

十月十日 信長上命

信長上命

十一月十四日、藤孝、長春等、合兵、向、

村重、伊丹城、中、出、步卒、逆戰、藤孝  
等、兵、擊、却、之、追、逼、城、放、火、乃、陣、于、加  
称、山、時、信、長、賜、書、

敬上文 足信丹、亦、人、多、是、能、危、信、長、

字嗣 如、信、長、如、信、長、之、程、同、合、兵、攻、入、

信、長、如、信、長、之、程、同、合、兵、攻、入、

十月十日

信長上命

信長上命

信長上命

水後河とよき平西より寄る人

十月七日

信長 馬印

長尾長部左衛門

十二月信長賜書於藤孝忠興

然此書了聞人々々傳聞する事なき

為人傳く事多き事未だ信長御前御座り酒

俵と事取ら御座り人々々傳聞する事なき

而し平信了聞人々々傳聞する事なき

平信了聞人々々傳聞する事なき

平信了聞人々々傳聞する事なき

上某と云人信長使事不為也

十二月十五日

信長 木印

長尾長部左衛門

長尾与一郎左

是年藤孝攻丹波國長曹曹澤或左衛

門尉小山城及大槻高城拔之

卯巳 七年正月藤孝在伊丹陣獻書於信

長有答書

長尾長部左衛門

長尾与一郎左

孝子... 長春長監護之

也

此乃公孫... 長春長監護之

七月藤孝與惟任光香合兵攻丹後

國嶺山城陷之

○十一月二十二日

誠仁親王移二條御所關白藤兼孝及左右大臣各乘轅月卿雲客步從

信長給藤孝惟澄長秀惟任光秀村井春長監護之

八年藤孝學射於彼

辰

伯部貞弘受印可證書

沙弓山紀古事

依如... 相傳是云

天長元年九月十七日

長春長監護之

長春長監護之

...

八月藤孝入丹後國居八幡山城  
手信與藤孝約授丹後國藤孝拜  
命之辱而攻拔敵城二十五國悉  
平至是入國始下政命信長賜書

至國中事之必心死之也  
名性何事ありて中述の深後政道彼  
是平由以平其の為人守之平  
平と手信と相謀るゝと信長也

八月十日 信長 墨印  
長賜答書上御及

藤孝欲築居城於列宮津獻書告信  
長賜答書詩之

形伐拔之四を形と云ふは信長  
以好年一擧居城事高野中比  
こお振るゝおの定之後平は  
信長と手信と相謀るゝと信長也  
名性何事ありて中述の深後政道彼  
是平由以平其の為人守之平  
平と手信と相謀るゝと信長也

信長

信長

國士吉東西雲 揮果志 藤孝光秀擊  
殺之 馳使告之 信長賜書

一所 日午 別 信長

揮之 國吉 東西雲 少 公 信長

我 働 志 河 果 少 公 信長

五 十 日 酒 志 少 公 信長

信長

信長

信長

巳年二月信長構馬場於禁庭召近

國羣士刷騎馬之糶以備觀覽惟澄

長秀及摺別若別兵士為先驅其次

細川信良或作良伊勢氏一色氏小笠

原氏藤孝及其子忠興无等其次

射士二百人其次率良馬六匹最末

信長至場既而各馳驅周旋謂撥天

皇在殿閣觀之○藤孝檢定冊後國

中屬士米地信長賜書

丹後國... 國中... 兵... 未印

天保九年三月六日

信長 未印

長生部... 備中

四月羽柴秀吉圍小早川隆景備中  
高山城信長欲益兵援之賜書於藤  
孝及一色義有平助後改為之備  
中國之教...

小早川隆景前... 備中  
植野卜右衛門...  
江と入るる一乃大...  
用美方... 信長 未印

天保九年

信長 未印

一又...

長生部...

六月二十五日秀吉帥兵數萬發播  
刈姫路赴月刈擊吉川式部少輔隆  
久森下道與中村對馬守春次鳥取

城藤孝承信長命遣松井兼之帥舟  
師以物秀吉以柔原才介為船監發  
丹後宮津至鳥取城下湊川藤孝獻  
書於信長有答書

「身通投ての初に後惟二給  
玉軍を急攻はるる事や為る事候入  
以玉國列向滅形多し如く候在  
別と云ふ事候に候に候に候に候に  
と云ふ事候に候に候に候に候に候に

七日廿日 信長 呈

長長長長長長

名海軍候とらるる事候に候に候に候に候に候に  
向敵如く候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
新用事候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
「國」之候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
城如候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
入事候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
御事候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に  
方働候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に

秀吉聞藤孝援兵至大喜乃使服坂  
基内安治來謝康之與安治至秀吉  
本此謁見秀吉謂曰濠川水軍之事  
以委卿云々毛利氏援兵謀入城有  
鹿足民部才堪水軍其名藉其因募  
鹿足為將率戰艦十艘殺船之艘味  
爽至濠川廣舟之出入無碍康之  
自脫甲曹乘小舟伴為南賈者潛入  
敵舟之間而使兵船圍敵乘原才介  
投炬燒敵船於是接戰康之見鹿足

兵奪我旗敵即移乘鹿足船力戰  
鹿足失利跳入水逃去康之家僕村  
尾四方助等走舟追之亦入水中遂  
斬鹿足秀吉遣淡野孫兵衛長政助  
康之至則軍散康之與長政同船往  
謁秀吉獻鹿足首并從兵首級十一  
生口十數人村尾亦同至秀吉感賞  
其功解其所着之羽織短上賜村尾  
且感康之所為此後雖有佳長感不  
載○九月信長沙汰丹後國一色義



有矢野氏、米地賜書於藤孝惟任光秀

丹後國一文字河野原令幸江並河原  
日回下くお候程申上りし由也

九月廿日

信長 朱印

長尾景虎御返

丹後國丹波郡一文字河野原令幸江並河原上  
為教字の六百石申渡り候、沙々、事々、と下  
に申渡り候也

九月廿日

信長 朱印

長尾景虎御返

一文字河野原令幸江並河野原上申渡り候、  
沙々、事々、と下に申渡り候也

九月廿日

信長 朱印

惟任日向也

丹後國一文字河野原令幸江並河野原上申渡り候、  
沙々、事々、と下に申渡り候也

比後... 伯耆敵城斬

九月十日 信長 朱印

長尾景春

信長日向

藤孝遣松井康之攻入伯耆敵城斬首數多而放火於城奪取敵船六十

五艘馳書告信長賜書... 於彼...

火敵船... 勸... 信長 朱印

長尾景春

松井康之等再至雲伯二列之疆擊取敵船數艘殺虜若干人信長賜書於藤孝賞之

松井守也如後幼平島主也其伯遠國者  
勸敵船投艦切九方其之也其人河津廣  
也、河津人并此東若者命、物房、其家、板  
見其心者以松井島、謀、感、情、少、深、人、其、心、也  
志、其、心、方、修、之、下、守、其、心、也、

九月廿九日 信長 呈

此書是松井守也

十一月二十五日鳥取城陷吉川隆  
久森下道與中村春次自裁松井康  
之歸丹後時秀吉授佩刀於康之勝

孝馳使謝之

壬午十年二月信長議擊武田勝頼赴信  
濃國、命藤孝留守丹後國、其子忠興  
興无及、一色義有從軍○三月十一  
日信長滅勝頼而凱旋藤孝獻書賀  
之、有答書

五月、信長方、狀、之、下、守、其、心、也、

其、心、也、  
此間文字不明  
其、心、也、

其、心、也、  
滅  
其、心、也、

其、心、也、  
其、心、也、

中より入しきるあふりおとてくるさく  
二列うしきるしり迎ひたり也

甲子午の 信長 皇帝

信長 皇帝

六月三日、明智光秀、我信長、信忠、自  
盡、愛宕僧正、幸朝<sub>坊下</sub>、馳赤脚<sub>坊下</sub>、丹  
後、告藤孝、藤孝大驚、追感平素恩遇、  
之<sub>後</sub>、渥羅髮更名<sub>三郎</sub>、才青、歸幽齋、光秀以<sub>テ</sub>  
信田權介<sub>ヲ</sub>為使、諭招藤孝、忠興不從、  
後光秀再寄書、陷以利不答、

元

一 沙弥よりいひし辨<sub>ニ</sub>はむ之<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>て直  
我<sub>レ</sub>亦<sub>ニ</sub>接<sub>シ</sub>て之<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>に<sub>ハ</sub>あり  
一<sub>ニ</sub>はむ之<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>に<sub>ハ</sub>あり  
入魂<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>也

一 周<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>内<sub>ニ</sub>接<sub>シ</sub>て<sub>ハ</sub>あり<sub>ト</sub>い<sub>ハ</sub>り<sub>ト</sub>也  
お<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>世<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>に<sub>ハ</sub>あり  
何<sub>レ</sub>か<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>に<sub>ハ</sub>あり

一 家<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>内<sub>ニ</sub>接<sub>シ</sub>て<sub>ハ</sub>あり<sub>ト</sub>い<sub>ハ</sub>り<sub>ト</sub>也  
立<sub>テ</sub>下<sub>ニ</sub>り<sub>ト</sub>い<sub>ハ</sub>り<sub>ト</sub>也、又<sub>ニ</sub>是<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>に<sub>ハ</sub>あり

百有之內之國之...  
...  
...  
...

六ノ九

光秀列

本肯忠興為信長以報仇為志屬秀吉無貳秀吉感悅寄誓書以堅其約

一 上及信長就仰...  
...  
...

授公事...  
一 好...  
一 自...  
...  
...

右...  
...

梵天帝釋四大天王愆而日本國中大小之神祇八幡大菩薩天備大自在天神殊受若白山氏神御罰深重可罷蒙者也仍起請文如件

天正十年七月吉

羽柴德前守

秀吉 血判

長岡共部大輔

長岡与一郎

七月二十日 奉旨至洛會聖護院道

澄及細也等於本能寺催連歌百韻

以追悼信長

西十三年十月詔叙奉旨法印自後稱

千住法印

口宣素

上卿 持明院中納言

天正十三年十月六日

宣旨

玄旨

宜令叙法印

藏人頭左近衛中將藤原慶親奉

西十四年秀吉賜玄旨城刈西岡三千

石地

於西園内為石目錄奉玄旨仍允金

玄旨

秀吉手判

天正十年四月一日

玄旨

知行目錄

一 七百八拾卷二斗

持清寺

一 千卷拾卷石

神足

一 千石

上之石

一 八拾卷石八斗

石見

合卷千石

天正十一年四月一日

秀吉書列

玄方流系

九月豊後國主大友左兵衛督義統  
以島津修理大夫義久出於兵於豊後

請援兵秀吉先授書於義久以諭之

佐 勅後藤藤原の國東兵衛助

果(被)任 備命云不新海(被)受(被)列(被)

且之許楠(被)後(被)松(被)多(被)因(被)津(被)同(被)相(被)論

事(被)也(被)之(被)正(被)國(被)之(被)由(被)之(被)也

亦(被)出(被)之(被)也(被)之(被)事(被)候(被)之(被)由(被)之(被)也

之(被)事(被)候(被)之(被)由(被)之(被)也(被)之(被)由(被)之(被)也

之(被)事(被)候(被)之(被)由(被)之(被)也(被)之(被)由(被)之(被)也

十月二日

秀吉書列

島津修理大夫

秀吉使<sup>手</sup>去首及<sup>手</sup>宗易<sup>手</sup>寄<sup>手</sup>書於義久<sup>手</sup>  
家臣伊集院氏

一 豊引<sup>手</sup>貴國<sup>手</sup>許<sup>手</sup>楯<sup>手</sup>氏<sup>手</sup>

國自<sup>手</sup>敵<sup>手</sup>中<sup>手</sup>内<sup>手</sup>院<sup>手</sup>越<sup>手</sup>形<sup>手</sup>及<sup>手</sup>通<sup>手</sup>以<sup>手</sup>乘<sup>手</sup>勢<sup>手</sup>

一 今年<sup>手</sup>却<sup>手</sup>敵<sup>手</sup>兵<sup>手</sup>水<sup>手</sup>降<sup>手</sup>乱<sup>手</sup>遂<sup>手</sup>大<sup>手</sup>庭<sup>手</sup>属<sup>手</sup>静<sup>手</sup>漢<sup>手</sup>

修<sup>手</sup> 禁<sup>手</sup>裡<sup>手</sup>家<sup>手</sup>中<sup>手</sup>宗<sup>手</sup>叔<sup>手</sup>名<sup>手</sup>正<sup>手</sup>信<sup>手</sup>

内<sup>手</sup>人<sup>手</sup>名<sup>手</sup>高<sup>手</sup>藏<sup>手</sup>口<sup>手</sup>經<sup>手</sup>少<sup>手</sup>松<sup>手</sup>房<sup>手</sup>正<sup>手</sup>宗<sup>手</sup>

敷<sup>手</sup>之<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>

下<sup>手</sup>之<sup>手</sup>

一 九<sup>手</sup>引<sup>手</sup>之<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>

五<sup>手</sup>海<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
倫<sup>手</sup>亦<sup>手</sup>和<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
理<sup>手</sup>心<sup>手</sup>之<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
若<sup>手</sup>於<sup>手</sup>五<sup>手</sup>海<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
難<sup>手</sup>勿<sup>手</sup>海<sup>手</sup>之<sup>手</sup>越<sup>手</sup>江<sup>手</sup>島<sup>手</sup>國<sup>手</sup>社<sup>手</sup> 江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>  
江<sup>手</sup>身<sup>手</sup>南<sup>手</sup>心<sup>手</sup>東<sup>手</sup>西<sup>手</sup>經<sup>手</sup>理<sup>手</sup>

上

玄方門

宗易門

宗易門



丁亥十五年九列之後、秀吉赴之、作倭字紀行一篇。

子戊十六年正月十九日、秀吉至、秀吉亭、秀吉進饗膳。○二十五日、關白殿、秀吉有倭歌會、以梅有佳色為題、秀吉賦二首。

寅庚十八年二月、小田原之後、秀吉赴之、作倭字紀行七月十五日、丹病歸洛、辰壬文祿元年、秀吉欲殺宗義、宗義答院晴兼、宗義稱晴兼、宗義之身也、以秀吉與島津

義久交、特遣於薩摩、濟圖之、秀吉至薩摩、一日會於亭、以秀吉之命告諭、義久亦密懷小刀、其意謂義久若不從、則刺之、義久不得已遣兵勸晴兼死、晴兼自殺、秀吉喜感、秀吉之勇謀、亦曾獻書於

大神君告事故、神君賜答書、秀吉札據之、以之為義久之被、秀吉亦以此為宗義之被、秀吉亦以此為宗義之被、秀吉亦以此為宗義之被、

乃交又... 乃交又... 乃交又... 乃交又... 乃交又...

八月二十日 家康御書到

出所

于三年二月二十五日、秀吉如吉野觀

死、秀吉等從行各詠、後歌遊賞、

未四年、秀吉奉秀吉之命、至薩摩檢考

陸隅、三割、點定領地、以五十萬八

千七百餘石、為島津兵庫頭義弘之

所領、十萬石、為義弘特判、髮、龍伯致仕之

料、一萬石、為秀吉旅館之料、六千二

百石、石田治部少輔三成領之、以三

千石、賜秀吉、義弘記其地名、以

贈秀吉

乃賜因所領之內

一、九百拾五石、九斗、三合、足廣村

一、中八百八拾九石、四斗、一合、三浦村

一、貳百石、細田村、內

此等石、石田治部少輔三成領之、

翌年、家康御書到、義弘判

文祿元年七月

龍伯司

龍伯司

也亦充

丙申慶長元年冬秀吉夢得倭歌一首作

己巳四年正月以島津氏有戰功於朝鮮

加賜四萬石於是改禾首三千石之地而代賜於越前國五大老授書於

禾首

三首

薩摩の將、此を以て島津氏を討つに  
方内、三千石を以て、伊予に自派別法に  
之を、今、之を、伊予に、

慶長元年

伊予

輝元

家康

利家

家康

家康

七首

十二月

大神君放鷹於掛列而入坂木城去首  
及織田有樂等奉從之

子五手上杉景勝謀叛

大神君征之忠興等為先鋒東行去首

在丹後田邊城既而石田三成反時

召忠興妻以為質不從七月十七日

自盡十八日去首聞丹波御馬兵來

攻冷圍國器械并鐵炮玉藥悉納諸

田邊城去首謂處守兵裁可五十騎

則直據一城以敵于衆由是放火於

宮侍久美嶺山等諸城唯存田邊城

命諸士分守其要害二十日賊將小

野木縫殿助石川備後守谷本羽守

衛友藤懸參河守永勝川勝右兵衛

秀茂高田河内守毛利民部又輔高

正早川主馬杉原伯耆守別取豐後

守小出大和守吉政赤松左兵衛山

崎左馬允家盛生駒左近正俊等帥

步騎一萬五千餘入丹後國張旌旗

於山上未進圍攻。玄吉以寡兵保孤  
城外無援。然諸士盡死力。能戰能守。  
踰月城不陷。帝慮玄吉若沒。則歌  
道之廢。詔德善院去。以以使修和議。  
去以盡力圖之。又詔遣中院通勝王  
條實條鳥丸光廣及前田主膳正茂  
勝未以於田邊城懇諭再三。玄吉不  
得已出城赴洛。○九月二十日。玄吉  
與本興忠隆興元孝之會於丹波國  
龜山馬堀。

第七寺

大神君使秀康全領越前國改。玄吉采  
邑而移賜諸山城國內有證書

山崎岡之寺。於原方村九百石。拾七石。而斗田  
紀伊。於下之極。內。拾七石。而斗田。向。水。系  
於山田村。方。石。而。斗。田。拾。七。石。而。斗。田。向。水。系  
拾。七。石。而。斗。田。拾。七。石。而。斗。田。向。水。系  
拾。七。石。而。斗。田。拾。七。石。而。斗。田。向。水。系  
拾。七。石。而。斗。田。拾。七。石。而。斗。田。向。水。系

長安七年九月

御書印

此

成庚

十五年未青去年至洛今茲八月之

初嬰病至二十日終於三條車屋町

和苑年七十七奈昆分藏遺骨於南

禪寺天授養及豐前國小倉郡泰勝

院徽宗稱未青大居士

忠興獻未青遺物藤定家筆色紙灰

蒙天目稱豐後尼崎臺基盤石局於

大神君紫蓋車重現箱於

台德公

未青歷任義晴義輝義昭及信長秀  
吉有勤勞而為

大神君被春遇平生武事之外藝才多

能受古今倭歌集於三光院藤實澄

極歌學秘蘊八條智仁親王中院通

勝三條公國及其子實條鳥丸光廣

皆師之傳受古今集蘊奧其餘廷臣

武臣為徒弟者太多其所著伊勢物

語闕疑抄百人一首抄詠歌大概抄

等書行于世又善連歌且至狂歌俳

諧無不窮巧頗知文字往々作詩知  
弓馬禮式精武家故實

大神君冷永井右近大夫直勝就問足

利幕府舊式亦旨損益隨宜獻家傳

禮式三卷且相古今刀其餘墨痕擊

敵割京等亦為世被稱有家集

寛永上皇勅賜號衆妙集乃染宸翰

為外題

藤孝屬信長於河内國堀溝城山城

國山田城及御牧具堀堀島等有戰

功此外有信長書皆不詳其事故併

記於左以俟再考

初信長御牧之御國同知事御安

宅之御御安立早よりく御安

屋之御御安立早よりく御安

屋之御御安立早よりく御安

屋之御御安立早よりく御安

屋之御御安立早よりく御安

信長 御安

信長 御安

こもへ 麦志 行行 一ト一ト 行々 出り  
尸行 事々 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り  
物 行々 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り  
行々 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り  
行々 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り

正月三日 未印

惟白 日向 一ト 一ト  
七 行々 出り 一ト 一ト

様 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り  
又 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り

惟白 日向 一ト 一ト  
七 行々 出り 一ト 一ト

正月三日 未印

惟白 日向 一ト 一ト  
七 行々 出り 一ト 一ト

様 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り  
又 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り 一ト 行々 出り

惟白 日向 一ト 一ト  
七 行々 出り 一ト 一ト



西の意に於ては、人の言ふに、其の換供の

日 未印

与るに於ては

...

...

...

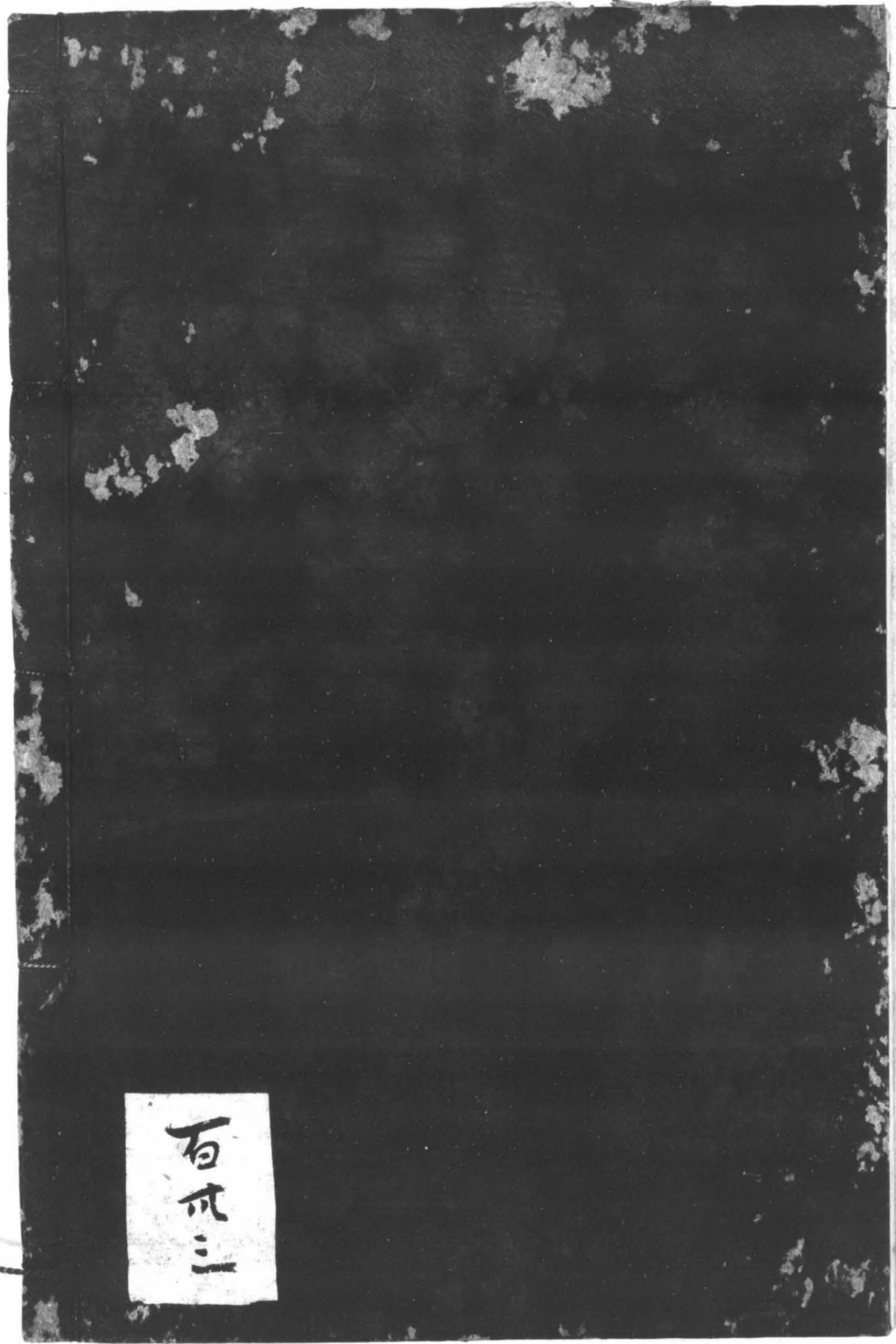
...

...

...

...

九州大学圖書印



百三